

森林整備公社資産評価方法について

1 「資産価値」計算方法

市場価逆算法により山元立木価格を計算し、分収率を乗じて算出している。

$$\text{山元立木価格} \times \text{分収率} = \text{資産価値}$$

(1) 山元立木価格の計算方法

$$(\text{予想価格} \times \text{歩止り} - \text{搬出経費}) \times \text{収穫材積} = \text{山元立木価格}$$

ア 予想価格 *原木市場での丸太価格の推計値

- ① 樹種ごと（スギ、ヒノキ）、林齢ごと「30」「40」「50」「55」「60」「70」「80」年生の7区分について、地位（土地の肥沃度）ごとの「樹高」、「胸高直径」を用い、採材方法（1本の木から取れる丸太の組み合わせ方）を推定する。
- ② 推定された丸太の区分ごとに、原木市場の「単価」（県下に5箇所ある高知県森林組合連合会の各団地最寄り共販所の丸太価格（H19年1月～3月平均の「m³あたり」単価）を使用）と推定丸太1本あたりの「材積」を乗じて、推定丸太1本あたりの「販売価格」を計算する。
- ③ 「②」で計算された丸太の「販売価格」の計を、同じく「②」で計算した「単木材積」の計で除して、m³あたりの「予想価格」を計算する。
- ④ 「①から③」の方法により、林齢7区分ごとの「m³あたり」の「予想価格」を計算する。（地位、樹種及び共販所ごとに計算）

イ 搬出経費

- ① 集材、運搬距離は、地形図より測定・判定し、経費については、高性能林業機械を使用するものとして計算。

次の条件を組み合わせ、「ヒノキ」、「スギ」、「マツ」それぞれに「8区分」の1m³あたり搬出経費を設定。

- ・集材距離： 500m、1,000m ・ベースマシーン： 0.45（バケット容量）
- ・トラック： 11t、7t、4t ・運搬距離 : 20,30,40,50,60km

ウ 歩止り

- ① 主伐 スギ 58～76%、ヒノキ 32～65%、マツ 50%
- ② 収入間伐 スギ 52～67%、ヒノキ 31～56%

エ 収穫材積

- ① 主伐については、山元立木価格が黒字のもののみ実施することとし、収穫表（標準地調査により、「地位」、「樹種」、「林齢」ごとの材積を計算した予想表）を元に、林齢ごとの団地別立木材積を計算。
- ② 収入間伐については、契約年数60年以上80年未満のものは40年生で、契約年数80年以上のものは40、55年生で実施し、間伐率12～14%（材積間伐率）で計算。ただし、集材距離500mに限る。

オ 山元立木価格

「ア」から「エ」により計算した項目により、山元立木価格を計算。

(2) 分収率

分収率については、契約書に基づき計算していく。

(3) その他

資産価値の積算

各年度の資産状況を機械的に積み上げていくため、31年生を超えている林分については資産額計算対象林分とし、その年度における林齢において皆伐するものとして(1)及び(2)の計算を、行い積み上げていく。

また、伐期に到達した林分については、その時点で資産価値を凍結し、そのままの状態ですべての資産額に組み入れていく。

なお、この計算式では、収入間伐実施林齢においては、主伐、収入間伐の両方が資産額に組み込まれることとなっている。

2 「投資金額」計算方法

投資金額は、既投資額から始まり、森林経営費、借入金利息、一般管理費等経費を年度ごとに積み上げてゆく。

(1) 既投資額

既投資額は、平成18年度末の借入金総額(公庫残元金、長期借入残元金、賛助金、市町村負担金)となる。

(2) 森林経営費(保育事業)

15年生で除伐、27年生で間伐を行う。収入間伐の実施出来ない事業地は、40、55年生で切り捨て間伐を行う。H19公社単価を使用。

資金は、補助金(80%)補助残の9割を公庫借入、不足を長期借入(教育は県補助金)でまかなう。

(3) 借入金利息

公庫、長期借入の将来利息を3.5%として計算。

(4) 一般管理費等経費

H17年度の実績を契約面積で按分して計算。

(5) 投資額

投資額=森林経営費-補助金+一般管理費-交付金+立木処分経費+利息